

切手の日誌

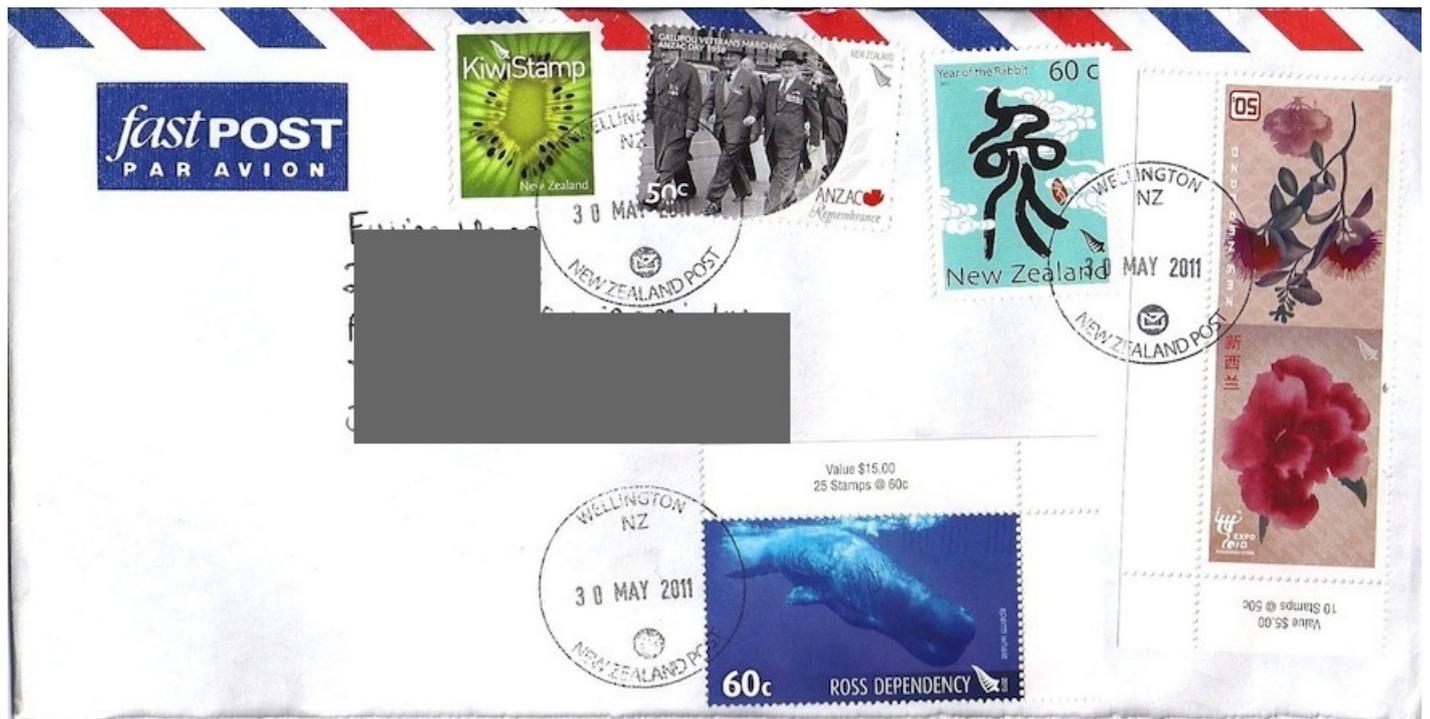
Stamp Diary



2011年6月号

6月2日 (ニュージーランド)

ニュージーランドのサラから切手が届いた。先方が要望していた多種のキティ切手が嬉しかったのか、いろいろな切手を貼って寄越した。

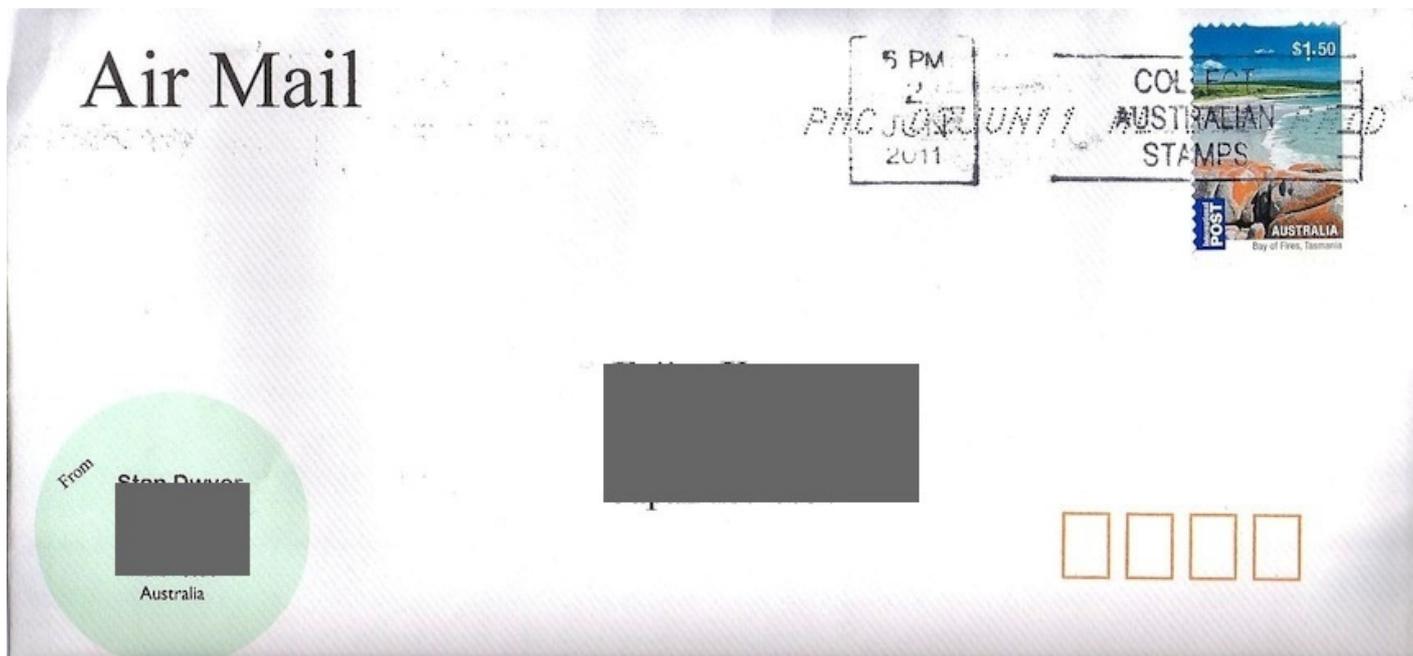


なお中身はmint (未使用) のシートが2枚…。一応、私は使用済み切手交換が専門なのですが、先方が気合い(?) 入れて送ってくれたので、それ相応の対応はしなければと少々悩む。なおこのシート2枚が今月の表紙で、下側のラグビー切手がなかなかニュージーランドらしい。

本当はmint (未使用) より、使用済みのあの「役目を果たした」使用感がよいのだが、大学生 (と自己紹介していた) はまだ在庫がないようである。

6月6日（オーストラリア）

やや強引に交換を申し出られ、なかなか経験豊富と思われるのでつい忙しいにも関わらず応じてしまったオーストラリアの交換者である。ヨーロッパ専門で進みたかったのが、断りの返事を考えている間に「送るから、住所を教えてください」と重ねてラプコールを受けてしまった。



オーストラリアはこんなに近い？と思ったほど、すぐに届いた。うん、確かにどれも状態良く優良な交換者であった。とにかく余裕ないので、チラッとオーストラリアの切手を眺め、案外悪くないかもと興味を抱き始めた。

早く返信しなければと思わず、とにかく「時間ちょうだい、ちょっと待って必ず送るから。今はとにかく忙しい」と言い訳並べて、時間を稼ぐ。本当のことだから仕方ないが、こういう時間稼ぎは日頃会社でもやっているのだから、結構要領は巧い。

6月7日（スイス）

名前を見る限りだと、中国か韓国系らしいがスイスより申出を受ける。先月のフランス人同様、まだ経験浅そうなので、まずは先方をうけてから返信内容を考えようと決めていた。案の定、貧弱な内容（しかも半分は紙付）であった。



まあ50枚だから、良しとしよう。特別まだ若い女性のようなだからキティ切手も入れてあげよう。ドイツやオーストリアは気合い入れて取組みたいと考えているが、スイスはどういう方針でゆくか思案中。

6月10日（デンマーク1967）

早速デンマーク切手に魅せられたので、この魅力がうまく伝わる自信は薄いですが、気に入ったので紹介する。そもそも、親しい友人が1年間ほどコペンハーゲンに滞在しており、そのとき2回計2週間ほど私もお邪魔した。私自身多少の土地勘やイメージがあり、それとデンマーク切手が何気にシンクロしている。

まずは一連の王室ものから紹介しよう。どこの国でもロイヤル・ファミリーは切手になる。

これは1967年発行の現在のデンマーク女王、マレグレーテ2世の結婚記念。イギリスの皇室や日本の天皇家のように、デンマークにも王室がある。



1967年もう45年もむかしですか。個人的にはこのシンプルなデザインに好感をおぼえる。日本では、このようなシルエットだけで許されるのだろうか？ 予備知識もなく見ただけでは、わかりづらい。

6月11日（デンマーク1986）

知らずにこれを手にしたとき「誰、誰？ これは何をしている誰？」と思った。消印で隠れているが、よく見ると右側に答えが書いてある。



1986年発行のフレデリク・デンマーク王太子18歳。何の記念だろう、デンマークは18歳で成人なのかな？ 表情を妨げている消印の下で、まだ何だか青さが残っている雰囲気であるが、今年43歳になる王太子はなかなかハンサムである。当時、自分がこんな切手になって顔にスタンプ押されて恥ずかしいかな？ それとも、生まれたときから王子の君としては当然の任務かな？

6月14日に被災地宮城県東松島市（私のママの実家がある）を慰問しているのを、私はしっかり「あ、切手のプリンスだ」と確認した。

6月12日（デンマーク1997）

一見して王室切手と検討はついたが、在位〇〇記念か結婚〇〇記念か理由はないのでわかりかねていた。調べたところ、Silver Jubileeとあった。銀婚式かと思いきや、結婚は1967年だったので、在位25周年ですね。何で女王が正面で王が横向き？女王に比べて王は若くないか？と考えたのですが、王ではなく王子だったので、あなたは。



本当は4枚セットなのですが、この額面がきっと日本の80円に相当して一番よく使われるのだろうな。できれば他の3枚も欲しい。でも正装している女王と王子のこの切手が一番素敵だ。

Jubileeという言葉だが、まずはロンドンの地下鉄の路線名を思い出す。調べたところ、このJubilee（ジュビリー）という言葉は、ユダヤ教から来ていて25年または50年に1度の周期で行われる祝祭を意味するようで、ロンドンの地下鉄はエリザベス女王の在位25周年（Silver Jubilee）を記念して命名されたとのこと。納得。でも実はジュビリーという響きが意味もわからず好きかも。

6月13日（デンマーク2000）

女王さま、マレグレーテ2世は美人で国民の人気も高い（らしい）。確かに人を寄せ付けない美人ではなく、人を寄せ付ける美人だと思う。ロイヤル・ファミリーは国民に愛されてこそ、国民も幸せな気分になれる。

タバコもスパスパ吸われるようだが、女王さまの素顔はどのような感じだろう。wikipediaの写真は眼鏡かけている…。ゲルマン系の民族は身体が大きいに違いない。



右は普通切手の女王さま。恐らく素顔に近いのでは？ 左は少々デフォルメされた女王さま。何を記念して発行された切手が不明ですが、生憎消印が少々邪魔している。以前は抽象さあれることに抵抗を覚えていたが、最近はこの抽象化された絵柄に強い関心がある。

6月17日（デンマーク）

経験豊富そうなおじさまと思っていたが、早くもドイツ切手を送ってきた。当初は300枚交換の申出を、こちらか150枚にしてもらったのに。デンマーク切手がこちらの期待以上の感激があったので、がっかり取組みたいと思っていたところ、早々に「ドイツを送ってもよいか？」と言われてしまった。



この切手も好きだが、毎回これもちょっと飽きる。好物は毎日食べても耐えられる私だが、封書の切手はすぐ飽きる。なお、同封物のドイツ切手は状態も内容も満足だった。次の戦略を考えないといけないかな？ まだ続くかな？

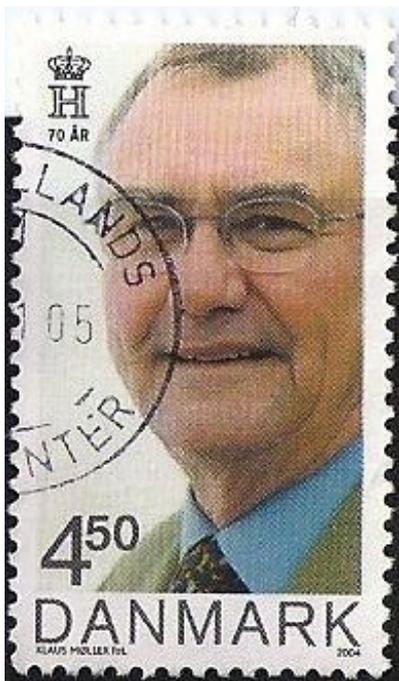
6月19日（デンマーク2004）

最後のロイヤル紹介をする。



先のイケメン王子フレデリクの結婚記念である。1967年のママに比べれば、もっと庶民に歩み寄った感じがするが、日本の厳かな雰囲気と比較するとまだまだシンプルである。ちなみに王太子妃はシドニー・オリンピックのころナイト・バーで知り合ったオーストラリア出身の方とのこと。シンデレラ・ストーリー？

似たような雰囲気の切手もう1枚あった。



何だ？何だ？ 何の記念か？と思ったら、ヘンリク王のお誕生日記念とか。フランス貴族の出身のようですが、他所から来たしどうしても脇役になってしまう。

6月21日 (フランス)

久しぶりのイザベラである。中にはピンクの紫陽花の絵はがきが入っていた。



右上にあるような、割と最近のフランス切手が主として150枚、だけど10枚ほどはむかしの大柄の絵画シリーズが含まれていた。一応、彼女は私との交換のためコツコツ(?)用意してくれているとのこと。また忘れたところに、連絡が来るのかな。

どうも例の交換サイトで私の評判がかなりよいらしく、今月も多くの申出を受け、そのほとんどが2回目につながっている。さてさて、何人続くかな。記録を取り始めた。何でも記録してしまう性格である。

6月22日（アメリカ）

私のことを信頼してくれたのか、いつも早々と送ってくれるアメリカのジョー。今回も私の昔の国際郵便のイメージそのままの郵便を送ってくれた。



同封物は1980年代後半のアメリカ切手であるが、1960~70年代に比べて何となく魅力が落ちる。今月の残りと来月にかけて、ジョーからのアメリカ切手を紹介したいと思っている。これまでアメリカと言えば消費社会の代償として粗雑というイメージも拭えないのであるが、ジョーの切手は状態が非常に良い。そのジョーの抜けのない交換品に魅せられて私はかなりアメリカ切手に興味を抱き始めている。

6月24日（ルーマニア）

久しぶりにルーマニアから。今回の交換パートナーであるエドゥムンドはルーマニア、ハンガリー、ポーランドと申出があったが、ルーマニアはコジョルカからがっつりもらいハンガリー共々自分の中で関心落れているので、ポーランドで約束した。



同封物はCT0（注文消）であったが状態も良く、フランス・ドイツ・アメリカが落ち着いたら改めて東欧も取組みたいところである。

6月26日（アメリカ1960）

アメリカの交換パートナーであるジョーからの紹介である。本当はオランダを整理したしデンマークとのロイヤル切手比較も楽しいかなと思ったが、似たようなものを並べるよりは、いっそ異質なものをへ行くほうが面白いかと独り満足してアメリカを紹介することにした。

アメリカは皇室がないので、残念ながらロイヤル切手は楽しめないし、ヨーロッパのような歴史的観光名所も少ないので内容はもっぱら社会性や地域性を帯びたものとなっている気がする。まあ、それはそれで良いかと。

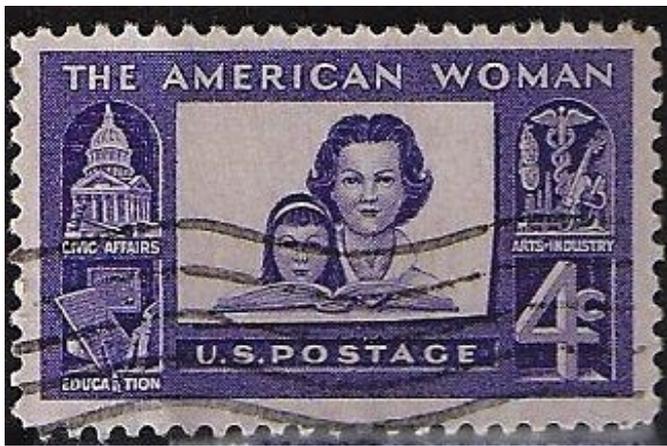
全て1960年発行の切手であるが、むかしの切手の特徴はこのモノクロ色切手と私は決めつけている。



そのまま、オリンピック記念切手ですね。このときはカルフォルニア州のスコーパーレーとのこと。カルフォルニアで冬期オリンピックはびいんとこないな。



これは「新しい生活に向けて歩む家族」という副題がついている。タイトルのWORLD REFUGEE YEARをあえて日本訳すれば、世界避難民年とでもつけるのだろうか。テーマは前向きだが、絵が暗いが、アメリカらしいテーマである。



最後はTHE AMERICAN WOMAN - 母と娘 - である。何故にこのテーマなのか？という疑問はあるが、アメリカですら男女平等と
言い切れない部分もあったのだろう。1960年代に起こるウーマンリブに先駆け、社会が彼女たちに「君たちのことは理解してい
るよ」と先手を打ったのだろうか。

ついテーマの分析をしてしまったが、それよりも戦後から1960年代まで見受けられるこの手のモノラル色切手に私は時代を
感じ、当初は結構うんざりしていた。しかし、枚数も揃って来ると実は愛着すら芽生え始めている。カラーで勝負できない分
、均一の取れた図案にしてくれないと、面白みが出てこない。

掲載用に図柄は用意したが、時間切れで今月はこの辺で終わらせてもらおう。